

# ポイント 短歌の文法

安田 純生すみお

## 助動詞「べし」の接続

これから文語文法について述べていきます。誤解のないように初めにいっておきますが、文語文法というときの「文語」は、文章語を意味しません。おおよそは平安時代の日本語の体系を意味しています。もつとも、その前後の時代のことばをまったく無視しているわけではなく、とくに奈良時代までのことばは、文語に含めて捉えるのが普通のようなのです。そう捉えないと、『万葉集』特有のことばは文語でなくなってしまう。

そして、現代の文語体表現の中で、文語に存在しなかった言い方を用いた場合、その言い方は誤りということになります。しかし、文語になかった言い方であったとしても、後世の日常語の中にある言い方はもちろんですが、日常語とはいえないけれど、和歌や文章において、そこそこ一般化していた言い方を、誤りと断じてしまっているのかどうか。ある程度一般化し、作者と享受者をつなぐことばとして通用していれば、そういった言い方もあることになり、少なくとも日本語として誤りだとはいえないでしょう。

たとえば、文語では、動詞の「す」に助動詞の「べし」が接続す

る場合、

人は憂しなげきはつゆも慰まずこはさはいかにすべき心ぞ

西行『山家集』

のように「すべし」となります。「べき」は連体形です。一方、「す」は終止形ですが、要するに「べし」は、「あり」「侍り」などの語に接続する場合を除いて、終止形に接続するのが原則なのです。右の歌の「人」は自分が愛する相手で、下二句は「これはそれでは、どのようにするのがいい私の心なのか」の意です。現代語では、この「すべき」を、昔と同じく「すべし」ともいっていますし、「するべき」ともいっています。そうしますと、文語体と思われる短歌に、たとえば「いかにするべき心」という表現が出てきたとき、その部分が文語の形ではないと指摘できても、誤りとは必ずしも決められないでしょう。文語体表現の中に現代語がまじっているのは日本語として間違いだ、とはいえないからです。現代の日常語では、逆に、「うるわしき友情ですね」などと文語表現をまじえて話したり書いたりすることが、ときどきあります。

しかしながら、同じく「べし」を用いた例ですが、次のような言い方はどうでしょうか。

容赦なく月日過ぐるに残すべき捨つるべきさえ決めがたく生く

『落合実子歌集』

この歌には、「残すべき」「捨つるべき」と「べき」が二回出てきます。問題は「捨つるべき」の方です。この「捨つる」は連体形であって終止形は「捨つ」ですから、薬師寺公義の作に、

とれば憂しとらねば人の数ならず捨つべきものは弓矢なりけり

『太平記』巻二十九

とありますように、文語では「捨つべき」となるのです。もつとも、現代語では「捨てるべき」ともいいますので、その「捨てるべき」を念頭において文語形に変換する際に「捨つるべき」となってしまうのかもしれませんが。しかし、そうなった要因が何であったかはともかく、近代以後の短歌や俳句を読んでいますと、「捨つるべき」に限らず、「生くるべく」「刻まるべし」「享くるべき」などと、連体形に「べし」を続けた例が頻出します。

実は、こういった例は室町時代くらいから現れているのですが、近代以後の文語体表現においては、かなり一般化しています。一般化しているということは、短歌や俳句などの作者に限定されるとはいえ、多くの人たちが違和感を感じずに使ったり読んだりしているということになります。もちろん、違和感を抱いている人たちもいるのですが、ともかくも通用している以上、現代の文語体表現の中には「連体形+べし」の形も存在しているともいえるでしょう。したがって、これを、単純に誤りとして切り捨てることは憚られるのです。ただし、文語にはない言い方だ、破格の言い方だといえます。

この「捨つるべき」「生くるべく」などが、前にあげました「するべき」と異なるのは、「するべき」が現代の日常語の中にある言い方であるのに対し、文語にもないけれど現代の日常語としても一般的ではない言い方だということです。日常語にある言い方は「捨てるべき」「生きるべく」などでしょう。つまり、現代の文語体表現の中には、文語でもないし、現代語ともいえないような言い方が存在しているのです。

近代以後の短歌には、次のような「べかり」も、しばしば見られ

ます。石川啄木の歌は三行書きになっていますが、改行されている箇所に入れておきました。また、ルビの多くは削りました。

秋の声まづいち早く耳に入る／かかる性持つ／かなしむべかり

石川啄木「二握の砂」

水ありてこの惑星は住むべかり宇宙放浪のオアシスとして

水上正直「太陽の直系」

この二首においては「かなしむべかり」「住むべかり」で文が切れている、つまり、「べかり」は終止形であると認められます。けれども、古語辞典などに掲載されている助動詞活用表を見ただければわかりますように、「べし」の連用形に「べかり」はあっても、終止形は「べし」だけで「べかり」が存在しないのです。連用形の「べかり」は、

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ

若山牧水「路上」

のように、下に「けり」などが続くときの「べかり」が、それにあたります。終止形の「べかり」も、文語にはありませんし、現代語でも用いられません。そういう「べかり」が近代の短歌には用いられているのです。このことばも、かなり広く通用しているという事実を考慮に入れば、誤りとはいいいくいでしよう。私としては、やはり、「文語の言い方ではありませんよ」「文語としては破格ですよ」と指摘できるだけです。

短歌を作る人の多くが、文法で悩んでしまいます。実際に講座には多くの質問が寄せられ、「短歌文法のツボ」講座を開講しましたが、「短歌春秋」でも取り上げて欲しいとのご要望が多く、今号から、安田純生先生に連載をお願いしました。